

研究ノート

ともに生きていくための共同体の変遷

今 堀 洋 子

The Transition of The Community to Live Together

Yoko IMAHORI

要 約

本稿では共同体を取り上げ、共同体の変遷を、伝統的社会における共同体（過去）と、現代社会に生まれた新しい共同体（現在）、そしてこれからのともに生きるための共同体（未来）として論述することを試みた。

まず、伝統的社会における共同体に関しては、2019年2月に開催された「東北農家の二月セミナー」という自主的な勉強会で、内山節氏が語ったことを中心にまとめた。

次に、新しい共同体に関して、吹田市にあるモモの家とそのネットワーク（総称 MOMO）を取り上げた。筆者も、2000年に地域通貨をきっかけにその存在を知って以来、今でも運営メンバーとして関わっている。MOMOは、モモの家という拠点だけでなくそのネットワークで構成されているため、多様性に満ちとらえどころのない共同体であるが、これまで色々な共同体を見てきた中でも、個性的で未来の共同体としてのヒントが隠されていると感じているので、MOMOに絞ってその特徴を中心に論じた。

最後に、これからのともに生きるための共同体に関しては、伝統的社会における共同体とMOMOを比較した上で、ソーシャルビジネスの新しい動きや、伝統的社会の共同体にあった大事なものは何かという視点から探ってみた。

分析してみると、MOMOは伝統的社会の共同体と同じ要素を多く内包していることがわかった。一方で、MOMOは、地域共同体でなくネットワーク型であるということが浮き彫りになった。未来を見据え、ともに生きるための共同体を考える時に、MOMOが一つの見本となりうるだろう。

キーワード：ともに生きるための共同体、伝統的社会、モモの家、MOMO、ネットワーク型、信仰、つながり、関係本質論

1. はじめに

1-1 研究の背景

1990年代以降に急激に進んだ情報化をはじめとする技術の革新によって、従来の国や地域といった物理的な垣根を超え、ヒト・モノ・カネが活発に移動し、地球規模で資本や情報のやり取りが行われている。いわゆるグローバリゼーションである。今や世界中の人々はグローバル社会の中で生きざるを得ず、先進国の人々は豊かな暮らしを享受しているものの、一方では、気候変動や飢餓や貧困をはじめとした多くの問題を抱えてしまっている。2022年1月20日、米国のBulletin of the Atomic Scientistsは、人類最後の日までの残り時間を象徴的に示す「the Doomsday Clock（終末時計）」が、これまででもっとも短い「残り100秒」と発表し、人類は非常に危険な状態にあると警告した^{i,ii}。

中でも、グローバル化した資本主義、つまり地球規模で資本がやりとりされることの影響は計り知れない。経済思想家の斎藤幸平氏は、「人新世の資本論」（2021）で、行き過ぎたグローバル資本主義の限界を指摘し、絶えず資本を増やし続け、「経済成長を求めていく」というシステムから、人間と自然が繁栄できるような「脱成長」システムに移行していくことを提唱しているⁱⁱⁱ。また、長年資本主義を批判し続けてきたセルジュ・ラトゥーシュは、「脱成長」（2020）で、「節度ある豊かな社会の基盤として、自己制御の倫理、コモンズの再構築、自立共生的な道具によるローカル経済の再創造、有機農業や再生可能エネルギーによる地域循環型経済の構築」を提案している^{iv}。

斎藤氏やセルジュに限らず、脱成長を提唱している人々は、同時にグローバルからローカルへの提案をしている。例えば、経済学者の宇沢弘文氏は「社会的共通資本」（2000）で、ゆたかな社会とは「全世界にあてはまるような、便利で統一的な経済システムのモデルなどというものはなく、地域ごとに、その地域が持つ諸条件を織り込んだ適切な制度があるという考え方である。この場合の制度とは、地域ごとの自然環境や、そこで発展した文化や歴史や産業に根ざしたローカルな性質に基づいており、その地の人間の知識、技能、好みなどの思考習慣を内包し、しかもその制度が状況に応じて変化することまでを含む。」^vと述べている。また1972年に世界に衝撃を与えた『成長の限界』の主著者であるドネラ・メドウズも、大学での講義やエッセイストとして、持続可能性への道筋が一段と厳しくなったと警告しつつ、晩年は実践活動としてカブ・ヒル村（米国バーモント州）という農・住集落での有志のコミュニティづくりの計画を進めていた^{vi}。これらはほんの一例にすぎず、現在も新しいコミュニティ（共同体）が、世界中で続々と誕生している。

1-2 問題意識と本稿の構成

これまで、筆者自身も循環型社会や持続可能な社会を探究していく中で、まずは足元の暮らしから始めることの重要性を感じ、それを共同体として育むことが大事であるという思いに至った。そこで本稿では、共同体を取り上げ、共同体の変遷を、伝統的社会における共同体（過去）と、現代社会に生まれた新しい共同体（現在）、そしてこれからのともに生きるための共同体（未来）として、論述することを試みる。

まず、伝統的社会における共同体に関しては、2019年2月に開催された「東北農家の二月セミナー」という自主的な勉強会で、哲学者の内山節氏が語ったことを中心にまとめる。

次に、新しい共同体に関しては、探究を続けてくる中で、国内外の様々な共同体に出逢い、足を運ぶだけでなく滞在もしてきた。本稿では、その中でも、吹田市にあるモモの家とそのネットワーク（総称MOMO）を取り上げる。筆者も、2000年に地域通貨をきっかけにその存在を知って以来、今でも運営メンバーとして関わっている。MOMOは、モモの家という拠点だけでなくそのネットワークで構成されているため、多様性に満ちとらえどころのない共同体であるが、これまで色々な共同体を見てきた中でも、個性的で未来の共同体としてのヒントが隠されていると感じているので、MOMOに絞ってその特徴を中心に論じてみる。

最後に、これからのともに生きるための共同体に関しては、伝統的社会における共同体とMOMOを比較した上で、ソーシャルビジネスの新しい動きや、伝統的社会の共同体にあった大事なものは何かという視点から探してみる。

ともに生きていくための共同体の変遷をまとめることで、我々が、これまでどんな道を歩んできて、今どの地点にいて、この先どう進めば良いのかが見えてくればと願う。

2. 伝統的社会における共同体

東北農家の二月セミナーは、農家と農業に関心のある人々の自主的な学習と討論の場であり、この趣旨に賛同する世話人と、内山節氏、農文協（農村漁村文化協会）が主催しており、2022年で26回目を迎える。毎年、2月末頃仙台市内で開催され、一泊二日で内山節氏の講義と討論という形式で行われている。筆者も2018年から参加をしている。2019年のセミナーの講義内容は、第1講「共同体の思想」、第2講「関係と実体」、第3講「明治以降の日本をといなおす」、第4講「変革の思想を再検討する」というものであった。このセミナーの内容は、「新しい共同体の思想とは」（2021）というタイトルで、農文協から出版されている^{vii}。ここでは、このセミナーで語られた、伝統的社会における共同体に関するエッセンスを抜き出すこととする。

2-1 人間が生きていくために必要な要素

内山氏は、人々が生きていくためには、「自然」、食物を採取するための「労働」、その食物を

贈答、贈与、交換という形をとった「経済」、そして「暮らし」が必要で、さらに人びとが定着するようになればそこには「地域」が発生し、地域には必ず「文化」が生れ、そして土着的な「信仰」も生まれると述べている。更に、信仰に関して、宗教とは言えないような土着的なものでも、人々がある程度、定住して安定的な生活を送るようになると必ず発生すると語っている。

そして、このようないろいろな要素が、相互性をもっていて、一体的であるのが、伝統社会の特徴だとし、それは「労働」のなかにも神様がいて、「暮らし」のなかにも、「経済」のなかにもいるということを意味する。つまり全部が一体性を持っているため、どれかだけ切り取ることができない構造となっているのである。この構造は、伝統社会のあり方であり、世界中どこでも変わらないとも述べている^{viii}。

2-2 江戸時代までの日本の共同体

江戸時代までの日本の社会は、民衆が社会を支配している時代であり、農村では、惣村自治が確立していた。そこでは、百姓たちが寄りあいで自分達がルールを決めていたそうである。実は、江戸期までの文献に「共同体」という言葉は見当たらず、明治になって「コミュニティ」の訳語として生まれたのが「共同体」だろうと内山氏は述べている。

江戸期までの日本では、共同体ということだけでなく、町とか村に加えて、講という組織が数多く存在した。葬式も講で行い、山岳信仰と結んで、富士講、伊勢講、白山講という講が無数にあった。それらも共同体といえるだろう。つまり、共同体というのは、ひとつの組織ではなく、講のような任意団体に近いものから、「わが町」、「わが村」というようなものまであった。そういうものが、多層的に、集積体として全体としてひとつの共同体社会を形成していたのである。そして、一人の人間がいくつもの共同体に属しており、そういうものが積み重なっている社会こそが共同体社会だったというふうにみなければならぬと内山氏は指摘している^{ix}。

2-3 伝統的な日本の共同体の特徴

伝統的な日本の共同体の特徴として内山氏が挙げるのが、共同体を自然と人間がつくるものとしてとらえてきたことであり、そして、人間のなかに、生きている人間だけではなく死者をも含んでいたという点である。つまり、日本では共同体は自然と生者と死者によってつくられていると考えてきたのである。このように自然とご先祖様の意見を入れながらうまくやってきたのである。そして、自然やご先祖様の意見を反映させるために、生きている人達が代理人的役割を果たさなければならず、そのために重要になってくるのが祭や年中行事だった。祭りで自然の神様を降ろしたり、年中行事としてお彼岸やお盆などで先祖供養をしたのである。また家の中に神棚があったり仏壇があったりして、毎日神様やご先祖様と会話をするなどしていたのである。このように、日本では祭りや年中行事が自治の仕組みとして組み込まれており、自然とご先祖様の意見を自分の意見として反映することができたのである^{xi}。

2-4 日本の民衆の思想としての関係本質論

内山氏は、「我々の世界に現れているものはすべて現象にすぎず、現象をつくっている関係こそが本質である」というとらえ方が日本の民衆の思想の根底にある」と指摘している。日本に入ってきた大乘仏教の軸にあったものが、関係本質論つまり、関係こそが真理であるという考え方で、それが日本のもとからあった考え方と一致したため、あっという間に大乘仏教が民衆世界に入ったのだろうと、内山氏は語っている。大乘仏教は、自分の本質というのは関係でしかなく、自分というものは自分がもっている関係の総和だという視点に立っている。関係は実体的にとらえることができないので、その意味で空であるというのが大乘仏教のとらえ方なのである^{xii}。

2-3で、日本の共同体は、自然、生者、死者によってつくられていると述べたが、これは、生者と自然、生者と生者、生者と死者の関係によって成り立っていると言い換えることもできる。関係本質論は、日本の民衆の思想を知るために重要であり、それは日本の伝統的社会における共同体を、観察する時にも決して見逃してはならない点である。

3. 新しい共同体の事例としてのMOMO

1章でも述べた通り、これまで筆者は国内外の新しい、言い換えれば1990年代以降に誕生した共同体と数多く出逢ってきた。ここではその中から、自らも運営にも関わっている共同体MOMO（モモの家とそのネットワーク）を取り上げ、その概要と特徴的な点を中心に論じてみる。

3-1 MOMOの概要

大阪府吹田市にあるモモの家は、昭和初期の佇まいがそのまま残る大きな古民家であり、庭には楠や桜などの大木もあり緑に囲まれている。阪神淡路大震災を経験して、小さなつながりの中で顔が見えたり、隣の人の名前がわかるといった安心が大切だと感じた義野（現在は福元）理恵さん（以降理恵さん）が、皆がいつでも集える場所として、この古民家で二人の子供を育てながら、家を開放する形で始めた^{xiii}。震災の翌年の1996年のことである。

モモの家という名前は、ドイツの作家ミヒャエル・エンデの「モモ」という作品からとられた。「時間泥棒から時間を取り戻そう」という気持ちがそこにはある。「モモ」に出てくる「オソイホド ハイイ」という言葉、自然のリズムで暮らしていくというのがモモの家のテーマでもある。

また「つながりのなかで はたらき まなび あそぶ」がモットーであり、網目のようにつながったネットワークの中で、暮らすこと、働くこと、学ぶこと、遊ぶことが境目なく一体となった世界をめざしている。そうして、モモの家がその拠点となって、全国の人々や団体とネットワークで結ばれた共同体MOMOが誕生したのである。

26年にわたって活動を続けているMOMOであるが、この間、代表や組織形態が変わり、構成員の入れ替わりがあり、それに応じて目的や活動も変えながら今日に至っている。以下は、2007

年時点でのMOMOの目的と活動内容^{xiv}である。

【目的】

人に必要な衣・食・住文化を見直し、次世代へ伝える。

自然と共生する暮らしを作っていく永続的な社会を目指す人たちの交流の場をつくる。

【活動内容】

1) 活動を伝える情報誌の発行

季刊誌「てんからっと」(年4回)

モモの家の通信「モモだより」(毎月)

2) 町の中の古民家「モモの家」を拠点とした活動

縁側美容室・半量カフェ・布ナプキンづくり・ヨガ・オカネについて語らう会・タイの手織り草木染の服販売・キャンドルナイト・糸つむぎ体験

3) 垂水神社での年に1度「天空人」まつりを開催

4) 糸田川おそうじ隊

5) 地域通貨「モモマネー」の試み

活動内容は、今では行われていないものもあるし、新たに加わったものもあるが、めざす方向は変わっていないことが確認できる。図1にモモの家の見取り図を示す。



図1. モモの家の見取り図(ブックレット「つながりのなかではたらきまなびあそぶ」より)

2022年1月現在、会員は約70名、毎月の会報（モモだより）の購読者は約50名であり、50代以上の女性の割合が一番多いが、30代から80代まで幅広い年齢層の会員がいる。

MOMOの会計であるが、毎年300万円前後の収入と支出がある。支出の大半は月19万円の家賃で占めており、人件費は一切発生していない。一方、主な収入は、年会費、購読料、イベント、物販、部屋貸し、寄附などである。

3-2 MOMOの特徴

紆余曲折色々ありながらも26年にわたり継続しているMOMOであるが、ここでは筆者が特徴的であると思う点を、以下の8つに絞って述べてみる。

① MOMOは相互扶助で成り立っている

MOMOは目に見えるモモの家（古民家）だけでなく、そのモモの家が拠点となって、全国の個人や組織とネットワークで結ばれており、その人達や組織に時に支えられ、時に支えるという相互扶助の関係で成り立っている。またそのつながり方がピラミッドではなく、フラットであるということも押さえておく必要がある。

MOMOが財政的にピンチだと知れば、寄附を申し出てくれる人達や組織が存在し、それによって何度も助けられてきた。一方で、3.11が起こり福島で原発が爆発した時、MOMOのネットワークで結ばれた人々や、そこからの情報を頼りに、関東方面からモモの家をめざして避難してきた人達がたくさんおり、我々運営スタッフはその対応に奔走したということもあった。

ちなみに、MOMOは、半農半Xという生き方を提唱している塩見直紀さん（京都部綾部市在住）、働き方改革を提唱し実践しているパプアニューギニア海産の武藤北斗さん、東京アーバンパーマカルチャー創始者であるソーヤ海さんや、生物多様性の国際会議の日本の市民リーダーでもある坂田昌子さんなど多才な人達ともつながっている。そんな人達をゲストに迎えての勉強会や座談会も開催している。

② 垂水神社とのつながり

モモの家から歩いて20分くらいのところに、延長5年（927年）成立の『延喜式』神名帳にも掲載されている垂水神社がある。背後には原生林の森があり、それを鎮守の森として守り続けてきている。「垂水」とは「崖から流れ落ちる水」を意味し、千里丘陵南端に位置する境内は地形的に丘陵からの湧水が生じる場所で、当地を鎮座地とする垂水神は、古くから水の神として信仰されていたそうである^{xv}。理恵さんは、垂水神社の参道に惹かれたのが決定的な出逢いで、その後何度も足を運ぶようになる。モモの家が生れる前のことである^{xvi}。モモの家が誕生してからは、毎年11月に神社の境内で「天空人（てんからっと）」まつりを開催していた。土地の神様に感謝し自然界とのつながりを感じるお祭りで、紙芝居やさん・手作り神輿・ライブ・盆踊り等等、2008年まで13年間続けられた^{xvii}。当時はこのまつりがMOMOの中心にあったようである。天空人まつりは終わってしまったが、今でも、大きなイベントの際に、垂水神社のご神水をいただきに

行くこともある。

③ 食と農的なものとのつながり

大阪の吹田市という都会にあるモモの家であるが、食と農的なものへの関心も結びつきも非常に強い。もともと理恵さんのお嬢さんがアトピーで苦しんでいたことから、「いのちと食」という思想に出逢い「いのちと食情報センター」を立ち上げていたという経緯があり、MOMOの根底にそのことがあるのだろう。MOMOのネットワークでも、元々農的な暮らしをしていた人、農家に嫁いだ人、MOMOで出逢い共に農的な暮らしを始めた人達などがある。

COVID-19以前は、お座敷でテーブルを囲んで、大勢で食事を共にするという事は頻繁に行われていた。ゲストを囲んでの食事会なども開催されていた。一品持ち寄りの時もあるし、料理の得意な人達が料理をつくってということもあった。野菜が豊富にある豊かな食卓がMOMOの魅力の一つでもある（図2参照）。

また、モモの家のMOMOショップでは、和歌山のみなべ町の中本梅農園の梅干しや、長野のりんご農家の田中はるこさんのりんごや、奈良の伊川健一さんのお茶などつながりのある方々の農産物を販売もしている。また、吹田市で自然栽培をめざし農薬をなるべく使わずに、多種多様な野菜を育てている井上さんの野菜が並ぶこともある（図2参照）。



図2. ゲストを囲んでの食事会（左）とMOMOショップ（右）（モモの家のFacebookより）

理恵さんは、モモの家を開くにあたり、「出会いの場をつくりたい、持てるものを出し合い、互いに自然に学んでいける場をつくりたい」という思いを抱いていた^{xviii}。そんな思いが実を結び、モモの家で出逢い結婚し自然豊かな場所で農的な暮らしをしている人達が、奈良、滋賀、広島、岡山をはじめ全国にいる。

④ 組織運営が合議制

2009年に理恵さんがモモの家を離れた時から、MOMOはモモクリエイティブス（通称モモクリ）をつのり合議制で運営をしてきている。その後、松村志保さんが代表をつとめていた時期もあったが、現在、代表はおいていない。現在、モモクリメンバーは10名程度で、運営会議は毎月1回開催され、モモだよりの制作、MOMOのスケジュール、イベント報告、家に関して気にな

ること、モモの家の住民とのやりとり、会計や会費などについての話し合いがおこなわれている。

モモの家に取材に訪れたミニコミ誌の編集に携わっている栗本敬浩さんは、この組織形態を、「ピラミッド型の組織ではなく、つながりのなかで生成する一人ひとりの役割や存在を尊重しあう円座の場へ」と表現している^{xix}。

⑤ 構成員の暮らしは別々だが中心のテーマは「暮らし」

MOMOの特徴に、共同体であるが、皆が暮らしを共にしているわけではないということがある。かつて理恵さんは、モモの家に暮らしながら代表をつとめていたが、それでもMOMOのネットワークとしては、全国にメンバーがいた。また、モモの家に通ってくる常連さんも、モモクリメンバーも、モモの家の近所かといえばそうではない。

MOMOは地域共同体ではなく、ネットワーク型の共同体なのである。けれども、中心のテーマは「暮らし」である。その「暮らし」も、「働くこと」、「学ぶこと」、「遊ぶこと」を含めた暮らしなのである。そして、「養生」に関するイベントや勉強会も多い。昔の人達が当たり前に行っていたように、自らの身体を自分で整えていくということも大事にしている。また、年末の恒例のもちつきには、毎年大勢の人が集まる年中行事となっている（図3参照）。

モモの家を訪れた人の感想として、心が落ち着くという声がよく聞かれる。モモの家は古民家であり、日本の家屋に当たり前にあった縁側や庭がある。もしかしたら、モモの家自体が伝統的な日本人の暮らしを記憶しており、それをたどりながらMOMOの活動が展開しているということなのかもしれない。



図3. モモの家でのもちつきの様子（筆者撮影）

⑥ お金について考える勉強会と社会実験

MOMOで長年続けてきた活動の一つに、お金について考える勉強会がある。1999年に放映された「エンデの遺言」（NHK・BS）をきっかけに日本で地域通貨の運動が急速に広まったが、

MOMOは先駆けて、地域通貨「モモマネー」の実験を始めていた。この活動のコーディネーターをつとめていたのが、現在は大阪市の中津商店街で養生のための衣食を自給する「富貴工房」を営んでいる富田貴史さんである。「モモマネー」が役割を終えた後も、MOMOの共通のお財布という意味の「モモのがま口」という実験を始めた。そして、チームをつのり、MOMOのブックレット「つながりのなかで はたらき まなび あそぶ」(図4参照)を出版した。このブックレットを、筆者が担当する授業「地域と暮らし」で教科書として使用していた時期もある。ブックレットの収益は、「モモのがま口」に入り、必要な人に融資するという活動も行っている。

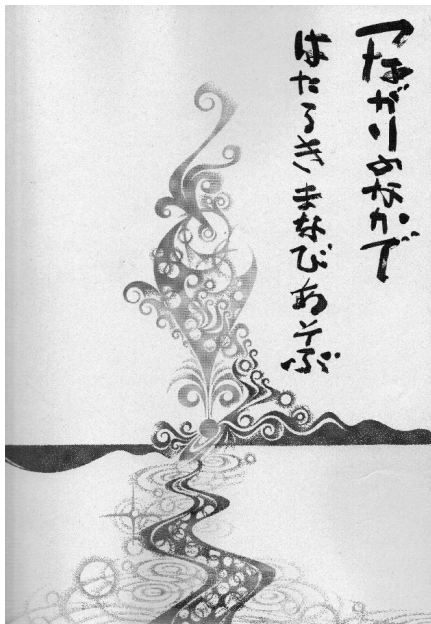


図4. ブックレット「つながりのなかで はたらき まなび あそぶ」の表紙と目次

⑦ 社会運動という側面

MOMOは、モモの家を拠点としたあくまで暮らしがベースになっているのだが、これまで、先に挙げたお金に関する問題に留まらず、様々な社会運動にも熱心に取り組んできている。

例えば、鎌仲ひとみ監督の「六ヶ所村ラブソディ」、「ヒバクシャ」、「ミツバチの羽音と地球の回転」といった映画の上映会を開催し、原発の問題、再処理工場の問題、原発再稼働の問題、原発を新しく建設することの問題などに関する、勉強会を開催するだけでなく、メンバーでデモに参加する、あるいは原発建設を反対している山口県の祝島を訪ねるなどもしてきている。沖縄の基地の問題、高尾山で高速道路のためにトンネルが掘られてしまったこと、リニアのためにトンネルが掘られようとしていることに関しても同様である。これらは全て、自然を破壊するという行為に対して異を唱えるというスタンスをとっている。また、生物多様性の国際会議に市民として参加し、現地の報告会をモモの家で開催するといったこともしてきている。また、戦争を反対

し平和を願うというスタンスで、憲法を守るという運動にも熱心である。そして、時には政治家（市議会議員）を呼んで話を聴いたり、衆議院選挙の時に自分達の選挙区の候補者に、原発に関するアンケートをとるといった活動をしたこともある。

⑧ 毎月発行している「モモだより」

会員や購読会員に向けてのMOMOの活動と情報を発信している「モモだより」は、2022年1月で294号を数え、毎月欠かさず発行がされている（図5参照）。ここには、その月のイベントの報告や、連載、会員紹介、詩などが掲載されている。



図5. モモだより291号と131号の表紙

モモだよりを毎月欠かさず発行し、活動を伝え続けていることが、MOMOの凄さであり、それを支える事務局の底力と言えるだろう。以前はそれに加えて、季刊誌「てんからっと」も年4回発行していた。改めて、それらを振り返って見てみると、MOMO自体の目的や活動を変えながら、さながら生き物のように、ここまで存続してきていることがわかる。

4. とともに生きるためのこれからの共同体

ここまで、2章で伝統的社会における共同体を内山節氏の講演をもとにまとめ、3章で新しい共同体としてMOMOを事例にあげて論じてきた。この章では、ともに生きるためのこれからの共同体について考えてみたい。そのためにまずは、伝統的社会における共同体とMOMOを比較することから始めてみる。

4-1 伝統的社会の共同体とMOMOの比較

表1 人間が生きていくための必要な要素はMOMOに含まれているのか？

人間が生きていく ために必要な要素		MOMO		
自	然	◎	食と農、自然を破壊する行為に異を唱える	
労	働	◎	手仕事、「つながりのなかではたらきまなびあそぶ」	
経	済	◎	お金について考える会、地域通貨、モモのがま口	
暮	ら	し	◎	共に暮らしているわけではないが、中心のテーマは「暮らし」
地	域	△	地域共同体ではなくネットワーク型の共同体、あおぞらモモの家	
文	化	◎	モモ日より等で情報発信を26年間継続、「つながりのなかではたらきまなびあそぶ」、年中行事	
信	仰	○	垂水神社とのつながり、祭り	

表1に、2章で述べた人間が生きていくために必要な要素として内山氏が挙げている、「自然」、「労働」、「経済」、「暮らし」、「地域」、「文化」、「信仰」が、MOMOにはあるのか、あるとしたらどのようなものなのかを示してみた。表からわかるように、MOMOは、地域共同体でなくネットワーク型の共同体であるため、地域とのつながりはそれほど強くない¹。また、信仰に関しては垂水神社とのつながりが挙げられる。その当時は「天空人まつり」が活動の中心であったが、現在は祭りの形も変わってきており、信仰は見えにくくなってきているように思う。

また、2-1で述べた通り、伝統的社会における共同体は「色々な要素が相互性をもって一体的であり、どれかだけ切り取ることはできない構造である」のだが、その点、MOMOも「網目のようにつながったネットワークの中で、暮らすこと、働くこと、学ぶこと、遊ぶことが境目なく一体となった世界をめざしている」ので、同じであるといえるだろう。

次に、江戸時代までの日本の共同体とMOMOを比較した時に、MOMOはネットワーク型の共同体であり、講という名前こそないが、多層的な構造になっている。例えば、ブックレットの作成はスイレンというチーム（講）をつくった。祭のためのチームつくられるし、川掃除もありであり、もちろんモモクリもチームである。MOMOは有機的なネットワークであるので、その時々に必要なチームが編成されている。

また、伝統的な日本の共同体は、生者、死者、自然で成り立っているという点から観るとどうだろうか。MOMOには常に自然が含まれている。更にここで、死者（ご先祖様）を広く先人たちと捉え、「自然やご先祖様の意見を反映させるために、生きている人達が代理人的役割を果たさなければならず、そのために重要になってくるのが祭や年中行事だった」という内山氏の言葉

1 2010年から天空人まつりを引き継ぐ形で、モモの家の近所の公園で開催されるようになった「あおぞらモモの家」は、周辺地域の人たちとの小さなつながりを意識したお祭りとなっていた。

は、MOMOが祭りや年中行事を大切にしてきたことと重なる。

最後に、関係本質論であるが、「つながりのなかではたらきまなびあそび」が示すように、常に関係の中で臨機応変に、あるいは生態的に活動が続けてきたのが、MOMOなのだろうと言えるだろう。

このように、MOMOは、伝統的な共同体の要素を多く含み、伝統的な日本の共同体が大事にしてきたことも引き継いできている共同体であるが、暮らしを共にしているわけでも、同じ地域に住んでいるわけでもない人達の共同体である。暮らしのスタイルや、古い慣習といった地域の制約に捉われることなく、共通の理念で集まった人々の共同体だからこそ、外に開かれてムーブメントを起こしてきたのではないだろうか。このMOMOのスタイルは、これからのともに生きていくための共同体の一つの形となっていくだろう。

4-2 ボーダレス・ジャパン

社会に課題が山積する中、社会問題を解決するためのソーシャルビジネスも広がりを見せている。なかでも「ソーシャルビジネス」で世界を変えようというビジョンを持って、事業を展開しているボーダレス・ジャパンの取り組みは、これからのともに生きていくための共同体のヒントになることが多い。

ボーダレス・ジャパンは、社会問題をビジネスで解決する、「ソーシャルビジネス」しかやらない会社であり、国内・海外や分野を問わず、40以上のソーシャルビジネスを展開している。解決しようとしている社会問題は、途上国の貧困、家畜、教育、シングルマザー、差別・偏見、耕作放棄地、難民の就労・暮らし、環境問題、若者の早期離職、児童労働、障害者の就労、ホームレス問題、市民参加、産後うつ、子どもの精神疾患、建築資材ロス、外国人の就労、無国籍問題、夫婦間の問題、地方創生など、多岐にわたっている。

図6に提示した定款前文の中で、ボーダレス・ジャパンは、「社会起業家の共同体」だと宣言している。社長の田口一成氏は「9割の社会問題はビジネスで解決できる」(2021)の中で、「各社が独立経営を行いながらも資金やノウハウをお互いに提供し合う、相互扶助の仕組み『恩送り経営』が大きな特徴である」と述べている^{xx}。

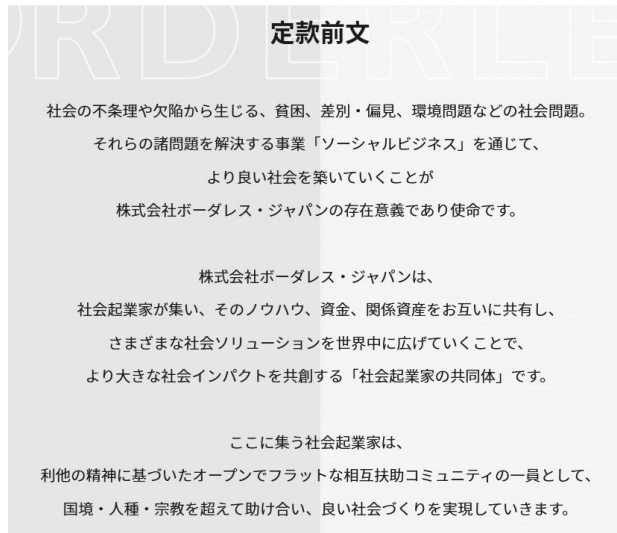


図6. ボードレス・ジャパンの定款前文^{xxi}

あくまでもビジネスは、社会的課題を解決するためのツールであるという点も特質的である。「経済発展・効率の追求をするあまり、たくさんの人を置いてきぼりにしてきたビジネスを今度は『誰一人取り残さない社会』をつくるために使う、ビジネスの使い方を変える時がきた」と田口氏は述べている^{xxii}。

更に、たとえ数百、数千の会社数になっても、最高意思決定機関は社長会（社会起業家）であり、社会起業家一人ひとりが主体の組織であることは絶対に変えず、誰か一人のトップが最終決定をする形ではなく、全員の合議制で決めていくと語っている^{xxiii}。

このように、ビジネスの世界でも、共同体的な形態が登場したことは新しく、今後も注目をしていく必要があるだろう。

4-3 伝統的回帰の視点

再び、2019年2月に開催された「東北農家の二月セミナー」に戻り、内山氏がともに生きていく共同体のために何が必要か？と述べている点をまとめておきたいと思う。

まず、内山氏は、日本の伝統的な共同体がもっていた「いまみると、これは別に潰さなくてもよかった」という大事なもののや、大事な精神を生かして現代的に再創造する、創造力が必要であると述べている^{xxiv}。

また「労働とか暮らしとか文化とか自然とか、そういういろいろなものが一体的に展開できるような世界こそが私たちが安心感をもって無事に生きることができる世界ではないか、それこそが虚構ではない世界ではないか、そういうことを考える必要が生じてきた。」とも述べている。そして、「相互性をもっていろいろな要素が展開していたあのかたちを現代的に再構築すること

は不可能なのだろうか」と疑問を投げかけている^{xxv}。本稿で取り上げたMOMOは、意図せずに、そのかたちを現代的に再構築してきている一つの見本ではなかろうか。

また、関係論から考える必要があるとし、「個人の固有の権利」ではなく、むしろ「自然と人間がどういう関係をつくったらお互い尊重し合える社会ができるのか」、「どういう関係をつくったら差別されたり不当な扱いを受ける人がいなくなるのか」を考えないといけないとも指摘している^{xxvi}。

そして、共同体という言葉も、宗教や信仰なしで使う苦しさがあるとし、「もう一度、今日的な『宗教』『信仰』の世界と違った意味の宗教・信仰のようなものを視野に収めなければならないし、そういうものをある程度生かしていくとすると、どのようなありようがあるのかも、検討されなければならない」と述べている。その際、「明治の初期に禁止された修験道は、日本の古い信仰のあり方を残しているの、そのことを考える際のヒントになるだろう」という内山氏の意見に筆者も共感する。そして、信仰の問題は、「『地域』という言葉を使っているときに、この問題をどういうふうにみていったらよいのか、それはとても重要になってきている気がする」とも語っている^{xxvii}。

5. おわりに

5-1 まとめ

ここまで、共同体の変遷を、伝統的社会における共同体（過去）と、現代社会に生まれた新しい共同体（現在）、そしてこれからのともに生きるための共同体（未来）として論述してきた。

2019年2月に開催された「東北農家の二月セミナー」に参加した時点では、そこで語られた新しい共同体の思想と、筆者が関わっているMOMOを結び付けて論じてみるということは思いもしなかった。一方で、MOMOに関わって以来、国内外の注目されている共同体と比較しても、MOMOのユニークさは際立っていたが、なかなか言語化できずにいた。

今回、伝統的社会の共同体の要素と特徴を整理し、そこにMOMOを当てはめると、MOMOは多くの要素を内包していることがわかった。そして伝統的社会の共同体とは異なっている点として、地域共同体でなくネットワーク型であるということが浮き彫りになった。また、信仰や宗教に関して、垂水神社とのつながりが薄れてしまったことは、MOMOに何らかの影響を与えているのではないかと感じた。

未来を見据え、ともに生きるための共同体を考える時に、MOMOが一つの見本になりうるだろう。そして、ビジネスの世界でも、社会起業家の共同体を宣言しているボーダレス・ジャパンも注目していきたい。

更には、共同体における信仰や宗教をどうとらえるかということに関して、日本の古い信仰のあり方を残している修験道が道しるべになるという点も見逃さないようにしないといけない。

5-2 課題と今後の探求

本稿では書ききれなかったこと、更に探求したいことなどがあるので、最後にそれらを挙げておく。

第一に、MOMOに関して創立当初からのモモ日よりや、てんからっと、ブックレットなど活動を伝える情報誌を丁寧に読み、MOMOの変遷を調査する必要がある。

第二に、MOMOに携わる人達の声を集める必要がある。それは現在携わっている人、過去に携わった人達も含め、当事者としてMOMOについて語ってもらったものをまとめたい。

第三に、今回は、MOMOだけを取り上げたが、例えば、イギリスのシューマッハ・カレッジであるとか、全世界的な広がりのあるトランジション・タウン、また国内の3.11をきっかけに立ち上がった共同体、そして離島の共同体など、筆者が滞在した共同体など新しい共同体は数多くある。MOMOとそれらの共同体を比較するというのもしてみたい。

これらを探求することで、MOMOの特徴を更に浮き彫りにするだけでなく、新しい共同体を類型化することもできるだろうし、これからのともに生きていくための共同体につながっていくだろう。

第四としては、これまで研究してきた「修験道に焦点をあてたまちづくりの可能性 ～羽黒修験道を事例に～」^{xxviii}と関連したテーマとして、これからの共同体における信仰や宗教についての姿も探っていきたい。

参考文献・参考サイト

- i PRESS RELEASE—At doom's doorstep: It is 100 seconds to midnight
<https://thebulletin.org/2022/01/press-release-at-dooms-doorstep-it-is-100-seconds>
(2022年1月30日参照)
- ii 「終末時計」“残り1分40秒” 3年連続最短に米科学雑誌が警告
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220121/k10013441661000.html>
(2022年1月30日参照)
- iii 齊藤幸平、2021「人新世の資本論」集英社新書
- iv セルジュ・ラトゥーシュ、2020「脱成長」白水社
- v 宇沢弘文、2000「社会的共通資本」岩波新書
- vi ドネラ・H・メドウズ、2007「『成長の限界』からカブ・ヒル村へ」生活書院
- vii 内山節、2021「新しい共同体の思想とは」農文協
- viii 内山節、2021「新しい共同体の思想とは」農文協、51頁
- ix 内山節、2021「新しい共同体の思想とは」農文協、42頁～
- x 内山節、2010「共同体の基礎理論」農文協、81頁～
- xi 内山節、2021「新しい共同体の思想とは」農文協、34頁～
- xii 内山節、2021「新しい共同体の思想とは」農文協、61頁～
- xiii suilen、2010「つながりのなかではたらきまなびあそぶ」、遊文舎、12頁
- xiv 義野理恵他、2017「てんからっと100+6号」MOMO
- xv Wikipedia 垂水神社（吹田市）

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9E%82%E6%B0%B4%E7%A5%9E%E7%A4%BE_\(%E5%90%B9%E7%94%B0%E5%B8%82\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9E%82%E6%B0%B4%E7%A5%9E%E7%A4%BE_(%E5%90%B9%E7%94%B0%E5%B8%82))

(2022年2月1日参照)

- xvi 加藤直美、1996「つなぐのは、ひと 垂水神社宮司 竹内天之神さん『千年の森を守る』」てんからっと Vol.53
- xvii 都会で農的暮らしをつくる情報発信スペースモモの家
<https://amanakuni.net/omise/momonoie/index.html>
(2022年2月2日参照)
- xviii 都会で農的暮らしをつくる情報発信スペースモモの家
<https://amanakuni.net/omise/momonoie/index.html> (2022年2月2日参照)
- xix 栗本敬浩、2019「豊かでおもしろいネットワーク拠点、『モモの家』」モモだより 266号
- xx 田口一成、2021「9割の社会問題はビジネスで解決できる」PHP研究所、14頁
- xxi ボーダレス・ジャパン 私達の考え方
<https://www.borderless-japan.com/whoweare/identity>
(2022年2月3日参照)
- xxii 田口一成、2021「9割の社会問題はビジネスで解決できる」PHP研究所、19頁
- xxiii 田口一成、2021「9割の社会問題はビジネスで解決できる」PHP研究所、330頁
- xxiv 内山節、2021「新しい共同体の思想とは」農文協、112頁～
- xxv 内山節、2021「新しい共同体の思想とは」農文協、52頁～
- xxvi 内山節、2021「新しい共同体の思想とは」農文協、145頁
- xxvii 内山節、2021「新しい共同体の思想とは」農文協、133頁～
- xxviii 今堀洋子、2020「修験道に焦点をあてたまちづくりの可能性 ～羽黒修験道を事例に～」追手門学院大学地域創造学部紀要、5号、1～19頁

2022年2月3日受理

